

論 文

ホノボノ考

小林賢章

同志社女子大学
表象文化学部・日本語日本文学科
特別任用教授

About Honobono

KOBAYASHI Takaaki

Department of Japanese Language and Literature, Faculty of Culture and Representation,
Doshisha Women's College of Liberal Arts,
Special appointment professor

本稿は、保科恵「勢語四段と日附規定―「ほのぼのとあくる」時刻―」（『二松學舎大学論集』第五十八号 二〇一五（平成二十七）年三月十六日発行）の所説を基にして、ホノボノについて述べようとするものである。論の展開は、保科論文をなぞる。また、保科の引拠した資料は〔資料一〕のように、保科の論文のまま引用する。その全ての資料（根拠）を引用するわけではないので、〔資料N〕の番号は連続しない。私の引用資料は、〔一〕のように丸括弧付の番号により、保科の資料と区別するものとする。

繰り返すが、本稿は保科の論文を否定するものではない。その意図はむしろ逆で、保科の論を補強しようとするものである。私の本論文の意図を理解して頂くためにも、保科の論文の精読をお願いする。

—

保科の論文は、『伊勢物語』四段の引用から始まる。煩雑になるが、本段落の大概をすることが、本段理解には重要な意味を持つから、本論もここで引用しておく。

〔資料一〕むかし、ひんがしの五條に、おほきさいの宮、おはしましける、にしのたいに、すむ人有けり。それを、ほいにはあらで心ざしふかかりけるひと、ゆきとぶらひけるを、む月の十日ばかりのほどに、ほかにかくれにけり。ありどころはきけど、人のいきかよふべき所にもあらざりければ、猶、「うし。」と、思ひつつなん、ありける。又のとしのむ月に、むめの花ざかりに、こぞをこひて、いきて、たちて見、ゐて見、見れど、こぞにみるべくもあらず。うちなきて、あばらなるいたじきに、月のかたぶくまでふせりて、こぞを思いいでて、よめる、

月やあらぬ春や昔のはるならぬ わが身ひとつはもとの身にして
と、よみて、夜のほのぼのとあくるに、なくなるかへりにけり。¹⁾

その結論として、当該最後の「夜のほのぼのとあくるに、なくなるかへりにけり。」について、章立ての最後の「勢語の夜明」の章で、「如上の検討の結果から結論すれば、「夜のほのぼのとあくる」のは日の出を指す表現ではない。男が東五条の邸宅を再訪した「む月の十日ばかりのほど」には、月は午前三時頃に沈む。男は、その「月のかたぶく」時刻まで「あばらなるいたじきに」「ふせ」った後、間もなく訪れた「夜のほのぼのとあくる」時刻になって、「なくなるかへ」ったのである。」と結論づけているのである。

この「夜のほのぼのとあくる」の個所は、諸注釈書で「夜明けの頃に」などと夜

が明るくなった時間にその場を去ったと解釈されるのが一般だが、決してそうではなく、午前三時過ぎに（月もなく、真つ暗なときに）、業平は帰宅したというのである。

二

保科は小林の論²⁾を引用し、当時の時間表現を理解している。

そして、この物語は「む月十日ばかり」の話とその日付を限定しているのである。ここで保科の指摘は重要である。十日の月は午前三時になると、ほほ月の入りの時間を迎えるがその点である。普通、当時の男女は午前三時までは女の家で時を過ごす、この時間になると男は女の家を後にするのである。既に、保科も論文で指摘しているが、この時間以降午前五時までがアカツキであり、その開始時点（午前三時過ぎとでもいう時点）がアカツキカタ（暁方）であった。

保科は最初に動詞「明く」の意味、というより時間表現の全体を、小林の私論をもとに論じていた。その点を私なりに略述すると、平安時代当時、午前三時が日付変更時点であった。当時の時間表現でいうと、丑の刻までが前日、寅の刻からが当日という考えである。そして、その午前三時になること（日付が変わること）を動詞アクは意味していたのである。

ここで、諸『古語辞典』の動詞明くを見てみると、全てといつてよい『古語辞典』で、「①夜が明けること。②日や月や年が明けること。」などと記述されているのである。私論では、『宇治拾遺物語』あたりにその最初の用法が見られるのであって、平安時代の女流文学や平安・鎌倉時代の和歌では、①の意味はないと考えている。

再説するが、この段で重要なことは、保科の指摘のように、「む月十日ばかり」の午前三時（今日の暦では十一日午前三時）には、月は空になくなっていくという事実である。

三

次に、保科の論は、ほのぼのの章をたてる。前節で、『伊勢物語』四段の話柄の業平は午前三時ころまでは一年前の思い出の地、五條の後の宮邸にいたことを論じていた。

その後、「月やあらぬ春や昔のはるならぬ わが身ひとつはもとの身にして」の歌を詠んだ後、「夜のほのほのとあくるに、なくなかへりにけり。」と帰宅の様子が語られるのである。一般的には、『伊勢物語』の諸注釈書や諸『古語辞典』などでは、この「ほのほの」は夜が白む頃と考えられている。保科はその事実を指摘した後、午前三時に、月を見終わって、夜がほのほのと明ける頃に宮邸を後にしたら、「四時間弱の空白時間を想定しなければならぬ不自然さが発生する」と指摘して、さらに、「一月一五日を過ぎる頃になれば、月の入の時刻が日の出の時刻とほぼ一致するようになるであろうけれども、それでは「十日ばかり」という規定の許容する誤差の範囲を超えるであろう」と、この「夜のほのほのとあくるに、なくなかへりにけり。」の文の諸解釈について、保科の論は強くその矛盾を指摘する。

この文をもう一度引用し、その意味を考える。「夜のほのほのとあくるに、なくなかへりにけり。」がその文だった。このうち、「夜の…あくるに」は平安時代の時間表現では午前三時になることを意味することは、何度も拙稿で述べてきた³⁾。それでは「ほのほの」の時間は何時頃を意味するのであろう。一般に、「ほのほの」は夜が白むころとされる。「夜の…あくる」は午前三時になる意味である。

「夜がほのほのと明ける頃」の一般的な解釈では「む月十日ばかり」の本段の日付規定と矛盾することは明確であった。それだけでなく、「夜の…あくるに」が午前三時になることを意味するのなら、その時刻表現に「ほのほの」が挟まれて存在することもまたそこに矛盾を指摘できるのである。「ほのほの」もまた午前三時前後の時間表現でなければならないはずである。

この矛盾に気のついた保科は「ほのほの」の意味のいろんな点を指摘する。

〔資料八〕 山里の門田の稲のほのほのと あくるもしらず月を見るかな（金葉和歌 集、巻第三・秋部・二一五番歌、中納言彰隆）

の歌を引用し、「資料八の詠歌には「山里の門田の稲の穂がほんのりと明るくなつて、夜があけていくの知らずに月をながめていることよ。」と理解する註解がある。」とこの和歌の口語訳の問題点を指摘した上で、「詠歌の内容を吟味すれば、天空にある月を見つづけている詠者が、朝陽が昇って周囲が明るくなって来ていることに気づかない、という状況は、常識的には考えがたい。」というまっとうな疑問を提示している。保科の論には〔資料八〕の前後の引拠に多くの意見を配しているが、こうしたまっとうな反論を提示していることが多い。そのことは、保科の論に当たって確認頂きたい。〔資料九〕から〔資料一五〕がほのほの夜が白む説の反論

である。

ここでは、保科の示した反証の用例の一部を引用する。

〔資料一〕 暁方に、風、すこししめりて、むら雨のやうに降り出づ。「六条院には、離れたる屋ども、倒れたり。」など、人々、申す。「風の吹き舞ふほど、広くそこら高き心地する院に、人々、おはします殿のあたりこそ、繁けれ、東の町などは、人少なに思されつらむ。と、驚きたまひて、まだほのぼのとするに、参りたまふ。道のほど、横さま雨いと冷やかに吹き入る。空のけしきもすごきに、あやしくあくがれたる心地して、「何ごとぞや。また、わが心に思ひ加はれるよ。」と、思ひ出づれば、いと似げなきことなりけり。(源氏物語・野分、三二二六)⁵⁾

右用例に対し、保科は、「これは「まだほのぼのとする」頃に、夕霧が六条院に、「参」った場面である。この場面の時刻は、冒頭に「暁方」と明示されている。「暁方」は、「暁」の時間帯の初め、「明け」た直後のことであるとい、その時点で「ほのぼのとする」のだから、これは夜間のことである。」と指摘しているが、正しい読み取りである。保科はこの後、「資料一二」として、「資料一」の後接文を引用し、その文章中に、「日のわづかにさし出でたるに、」とある点を指摘して、「日のわづかにさし出でたる」とあるのだから、それに前置する「資料一」の段階では、日の出の時刻にはなっていないと考えざるべきである。」と述べている。拙論も同意する。保科はここで、この時点の気象についての記述を加え、論述を加えているが、それもまた全くその通りである。

次に、保科の「資料一六」とそれに加えられた論述を引用する。

〔資料一六〕 御前、中宮の御方、朱雀院とに参りて、夜の、いたう更けにければ、六条院には、この度はところせしと、省きたまふ。朱雀院より帰り参りて、春宮の御方々めぐるほどに、夜、明けぬ。ほのぼのとをかしき朝ぼらけに、いたく酔ひ乱れたるさまして、竹川うたひけるほどを見れば、内の大殿の君達は、四・五人ばかり、殿上人の中に、声すぐれ、容貌きよげにて、うちつづきたまへり。いとめでたし。(源氏物語・真木柱、三三三七四)

ここで、保科は「朝ぼらけ」を、かならずしも日の出と結び付ける必要がない。「夜、明けぬ。ほのぼのとをかしき朝ぼらけ」の個所に注目して、「朝ぼらけ」は夜明けではないと指摘している。実は、朝ぼらけについては、『源氏物語』のアサボラケの用例を考察して、午前三時過ぎとでも言う時間だと拙稿に述べてい

る。⁶⁾ ことでの保科の論は正しいのである。「資料一七」「資料一八」「資料一九」は「朝ぼらけ」について述べた用例である。そのうち、ことに、「資料一八」の用例では、「暁方」を「朝ぼらけ」と言っていることから、「朝ぼらけ」は午前三時過ぎだと述べているが、まことにその通りである。

ここで、「資料一六」をもう一度見てみる。ここでは、「夜、明けぬ。ほのぼのとをかしき朝ぼらけに、」の文を見出す。「夜：明くる」「ほのぼの」「朝ぼらけ」と語句がならべられている。そのうち「夜、明けぬ」は午前三時を指す表現であった。ここで、保科の論や先に私も述べたところからすると、朝ぼらけは午前三時過ぎである。「夜、明けぬ。ほのぼのとをかしき朝ぼらけ」の用例で、「夜、明けぬ」と「朝ぼらけ」が午前三時過ぎを表しているのであった。だとすると、保科が「朝ぼらけ」という表現は、「明け」た直後の時間帯に使用される「資料一八」にも「暁方」とある―ものと見做される。」の指摘は正しいし、「ほのぼの」も午前三時過ぎを指して使われているだろうというのも想像がつくのである。

以上で、「ほのぼの」も午前三時過ぎといった意味になるとい保科の意見は肯定されるのである。とすると『伊勢物語』四段、「夜のほのほのとあくるに、なくなくかへりにけり。」は「夜のほのほのあくる」のは日の出(あたり)を指す表現ではない。男が東五条の邸宅を再訪した「む月の十月ばかりのほど」には、月は午前三時頃に沈む。男は、その「月のかたぶく」時刻まで「あばらなるいたじきに」「ふせ」った後、間もなく訪れた「夜のほのほのとあくる」時刻になって、「なくなくかへ」ったのである。」の指摘は誠に正しく、敬服する次第である。

四

ここまで、『伊勢物語』四段の保科の解釈に導びかれて、「ほのぼの」の意味を考えてきた。「ほのぼの」は決して夜が白々と明ける時間ではなかった。日付の変わった午前三時過ぎのまだ暗い時間だった。そのことを今少し論じてみよう。

「ほのぼの」が歌中に使用される和歌で、詞書(題詞)に「暁」がある用例は、

藤原保季朝臣

1549 入りやらで夜を惜しむ月のやすらひに ほのぼの明る山の端を憂き(『新古今和歌集』)

この歌は、1548番の歌の詞書「春日社歌合に、かすがのやしろのうたあわせ 暁月の心を」に組み入れられる歌である。歌中の「ほのぼの明くる」は「暁」と対応していることがわかる。題詞（詞書）に暁があり、歌中にほのぼのがある用例は多数あるのだが、ここで一部を示す。

（山家暁蛩といへる事を）

308 あしのやのひたほのぼのとしらむまでもえあかしてもゆくほたるかな（『散木』）

湖上暁霧

1113 しがのうらのさざなみしらむきりのうちにはのぼのいづるおきのともぶね

（『月清』）

暁聞郭公

4106 ほのぼのとまだくらはしの五月雨に山がくれゆく郭公かな

4107 郭公あり明の月にかへてきかむさつき雲にもるる一こゑ

4108 たづねつるかひも有明の時鳥月とたびねの空に鳴くなり（『拾玉』）

江辺暁萩

1534 明けわたる萩のすゑ葉のほのぼのと月のいり江をいづる舟人（『拾遺愚』）

2155 はつせ山かたぶく月もほのぼのと霞にもるる鐘のおとかな（『拾遺愚』）

以上の外、「暁」と「ほのぼの」の組み合わせの歌は多数見出される。

ここでは、そうした用例を例示するのではなく、その組み合わせの意味を考える。例えば、『散木』308番では、歌の中に「もえあかしてもゆくほたるかな」の下句がある。『拾遺愚』2155番では「霞にもるる鐘のおとかな」とこれも下句に見つか。これらの歌は暁（午前三時～午前五時）のどの時点を詠んでいるのであろうか。動詞アカスは午前三時の時間まで起きているという意味であった。また上接する動詞の連用形と組み合わされて、例えば、鳴き明かす、遊び明かすなどと使われる場合は、午前三時まで上接の動詞の行為をしているという意味であった。その結果として、動詞明かすは、「よもすがら」、「夜一夜」、「今夜」などと組み合わせ使用されることが多い。その理由は「よもすがら」、「夜一夜」、「今夜」などの語句は、現在のように朝方（夜明け）までの時間帯を意味するのではなく、午前三時までの時間帯を意味するからである。

とすると、308番の「もえあかして」は、「午前三時まで燃えつづけたうえに」といった意味になる。時間関係を明確にするために、野暮な口語訳にしたが、「午前

三時まで燃えていた蛩は、午前三時を過ぎても空間に浮かんでいるよ」という意味になる。「ほのぼのとしらむまで」の時間が、午前三時を過ぎていくはくも経たない時間と認定できる。

『拾遺愚』2155番歌はもつと単純である。題詞に「暁」があり歌中に鐘がある時は、この鐘は、「暁の鐘」と考えてよい。「暁の鐘」は午前三時に寺院で鳴らされる六時の鐘の一つ「後夜の鐘」として撞かれた鐘である。従って、この歌は午前三時頃に詠まれたことになる。次に、『月清』の1113番には、「いづるおきのともぶね」と詠まれる。暁になって、地引き網でも引くのだろうか、地引き網の片方を沖に下ろすために入り江を出ていく「とも舟」を詠んでいるのであろう。漁の開始が暁の開始と一致するのであろう。

『拾遺愚』の1534番の歌も、この場合は漁とは限らない。旅ゆく舟であろうか。やはり、午前三時の鐘の合図で旅立つのであろう。

ホノボノは暁の時間と関係するだけでなく、その開始時間と特に関係が深いことがわかる。

ホノボノは暁と関係が深かった。そのほかに、アケボノとも関係が深い。次に、題詞（詞書）にアケボノがあり、歌中にホノボノがある歌を引例する。

あけぼの

1268 いなのめはいはのかけはしほのぼのししばしやすらへまつならずとも（『散木』）

山ざとにて、あけぼのにひぐらしのこゑをききて

179 ほのぼのにひぐらしのねぞきこゆなるこやまつむしのこゑにはあるらむ（『実方集』）

春曙

310 霞たつ末の松山ほのぼのと浪にはなるよこ雲のそら（『壬子』）

などである。アケボノについては拙稿（「アサダキとアケボノ」）に述べたが、従来述べられていたように、夜があける頃の意味ではなく、暁（午前三時～午前五時）と重なる時間帯と述べた。曙とホノボノが時間的に重なる右の三例は予想される。前に暁とホノボノが重なることをこの節の前段で述べた。アカツキⅡホノボノ、アケボノⅡホノボノなのだから、アカツキⅡアケボノと言うのが拙論の結論である。

短歌の用例で、もう一つの事実を述べておく。

水郷朝霧

3267 朝まだきよどのわたりの渡し守霞のそこに舟よばふなり

3268 ほのほのとかよふを舟をたちこめてかすみによする淀の川浪〔拾玉〕

朝見花

953 ほのほのとはなはとやまにあらはれてくもにかすみのあけはなれゆく〔月清〕

ここでは、朝とホノボノの同時性が見てとれる。『岩波古語辞典』では、夕べ↓宵↓夜中↓暁↓朝と時間が経過していくと述べていた。この歌では、「朝」と「ほのほの」の同時性が読み取れる。ホノボノはアカツキやアケボノと重なることは本節で述べたし、先にアサボラケを論じたときに、アサ（またアシタ）とアカツキの開始時間は重なることを述べた。その事実をここで再述しているわけである。

ホノボノはアカツキ、アサ、アケボノなどと重なるし、アケグレ、アカツキヤミなどもその時間はかさなるのがこんな和歌の用例からも推量できるのだった。『岩波古語辞典』では、アサはアカツキに続く時間で明るくなった時間帯としているが、以上間違いであると言える。

五

最後に、ではホノボノとはどのような時間帯であろうか。その前にどうしても述べておきたい事実がある。ホノボノには動詞アケ（明く）やアケユク（明け行く）が後接して使用されることが多い。アケは日付が変わる意味であることは以上に説明できたであろう。

アケユクも既に私説を述べている。⁹⁾ 複合動詞アケユクはアカツキの時間帯を示唆して使用されるというものだ。少し説明を加えるなら、ユクが後接する時間表現には、クレユク、フケユクなどがある。そして、それらの語はクレの時間が進む。フケの時間が進む意味だったのである。クレは午後五時から七時の時間帯を意味する。この時間帯は、クレを語中に含んだユフグレという語形が一般的であるが、クレと確かに言うのだった。そのクレの時間が移行するのがクレユクだった。

フケユクも夜中の時間午後十一時から翌午前三時までの時間をフケと呼び、そのフケの時間が経過するのが、フケユクだった。時間表記アケ（午前三時～午前五

時）の場合、単独でアケとは使われにくいようだ。和歌の中で、

語)

ほのほのとあけの衣をけさ見れば草葉の袖は露のかかれる〔多武峰少将物語〕

のような例はみられるが、そのような例は少ない。ただ、アリアケ、アケボノ、アケグレなどのアケは午前三時から午前五時の時間と考えていいだろうから、アケが午前三時から午前五時の時間帯を示す語例は多数あると言える。

「ホノボノトアケ」と「ホノボノトアケユク」は先のアカツキ、アケボノなどとホノボノとの関係で述べたことと関係する。というより、当時の時間のとらえ方一般と関係するであろう。

作品の中に例えばアカツキとあったとき、一義的には午前三時の意味である。それと同時に、午前三時から午前五時の意味も自動的に持つのだった。時間表現は開始時刻とその時間全体を意味して使用できるのだった。

ホノボノもそうした二様の意味で使用されていたのであろう。ホノボノの開始時点と組み合わせられた用法が、「ホノボノトアケ」であり、ホノボノの全体的時間（午前三時から午前五時と組み合わせられて使用されたのが、「ホノボノトアケユク」だった。いささか極論だが、「ほのほの」を口語訳で理解するとき、アカツキと口語訳するとよいのである。

ここに述べた意見は、『毘沙門堂旧蔵本古今注』に「〔前略〕ホノボノト云ニ有四義。明若寿風也。万葉等ノ説也。明ハアキラカナル義也。夜ノアクルヲ云也。又左伝ニ明旦トト書キテ、ホノボノトヨメリ。〔後略〕、『和漢朗詠集和談抄』に「ホノノトハ暁ノ義。曙ト書リ。夜将ニ明ナントスル兒也。」とあり、『書言字考節用集』に「天明ホノボノ之義」の用例が見出される。

『毘沙門堂旧蔵本古今注』は『古今和歌集』409番の歌「ほのほのと明石の…」の歌に加えられた注である。この注では二つのことが言える。一つは「夜ノアクルヲ云也」であり、今一つは、「左伝ニ明旦ト書キテ、ホノボノトヨメリ。」とである。

前者「夜ノアクル」はもちろん現在使用される夜が明ける意味ではない。午前三時になる意味である。また、興味惹かれるのは「左伝ニ明旦ト書キテ、ホノボノトヨメリ。」の注釈である。この注釈だけでは何を言っているのかわからないが、次の『書言字考節用集』に「天明ホノボノ之義」の用例を合わせ見るとその意味が了解される。「明旦」は翌日の旦（あさ・あした）の意味である。前にも述べたように、翌日の午前三時から「旦（あした）」である。それがホノボノという意味になる。次の『書言字考節用集』の「天明」中国では、「天開」と同じように、日付が変わる意味

である。また、この「天明」には「平旦之義」の注がついていた。「平旦」は、「旦（あさ）の平まり」であり、寅の刻の意味である。これも夜が明ける意味である。『毘沙門堂旧蔵本古今注』の注と『書言字考節用集』の注では旦（あさ・あした）をホノボノと読んでいたのだ。

最後に、『和漢朗詠集和談抄』の私なりの解釈をしておく。「暁」は午前三時〜午前五時の時間帯を表す時間表現だった。「ホノノトハ暁ノ義。」は「ホノボノ」は暁の意味となる。『毘沙門堂旧蔵本古今注』の「明旦」と『書言字考節用集』の「天明」はともに午前三時にその時間帯が開始される。暁の開始時刻も午前三時である。したがって、ホノボノは午前三時頃以降の時間の意味になる。

次の「曙ト書リ。」は「曙」もまたホノボノと読むとでも言えようか。「夜将二明ナントスル兒也。」はこれも午前三時になることである。『毘沙門堂旧蔵本古今注』にも、「夜ノアクルヲ云也。」とあった。これらの注釈は同じ意味であろう。

この説の中盤で、ホノボノは「暁」とでも訳すのがいいと述べた。『能因歌枕（広本）』に、「暁をば、たまをしげ、あけほの、しの、めと云。」とある。ここでは、アケボノトアカツキの同一（時間）を言っているであろう。アケボノの「ボノ」とホノボノのホノ（ボノ）は同じ意味であろう。

六

最後に二つのことを述べる。用例は再出しないが、ホノボノには、「ホノボノトアク」と「ホノボノトアケユク」の二つの組み合わせがあることが知られる。動詞アケは午前三時になる意味であり、アケユクは暁の時間が経過する意味である。従って、「ホノボノトアク」は暁の開始時間になったことを意味し、「ホノボノトアケユク」は暁の時間が経過していくことを意味する。敢えて言うが、この両表現と夜が明けて明るくなることは無関係である。この両表現は時間を表現していたのである。

補遺 この論考は、保科恵の論考に導かれて、『伊勢物語』四段の「夜のほのほのとあくるに、」の解釈から出発している。「ヨノアク」は保科も引用してくれているように、拙論では午前三時になる意味であった。ホノボノについて、ここで、拙論を述べたことになる。論を進めるときには結論が見えて進めると、それこそ雲霧の中に結論の光明を見つけることは、難しさに雲泥の差がある。

保科の論に助けられたことを再説しておく。また、ここまでの論も十分に我が意

を述べられたとは思っていない。ただ、自らの特任期間という第二定年の到来を来年三月に控え、不満を含みながら、擱筆する次第である。

注

- (1) 保科の論文では、『伊勢物語』の引用は岩波古典大系によっている。
- (2) 拙著『アカツキの研究』（二〇〇三年 和泉書院）など。
- (3) 拙稿「明く」考―『源氏物語』を中心に―（一九九五年『同志社女子大学学術研究年報』第四六巻）
- (4) 『金葉集』の引用は岩波新大系によっている。
- (5) 保科の論文の『源氏物語』引用は『校本源氏物語』によっている。
- (6) 拙稿「アサボラケ考」（二〇一二年『同志社女子大学学術研究年報』第六三巻）
- (7) 本稿の和歌の引用は以下も含め、『新編国歌大観』による。
- (8) 拙稿「アサマダキとアケボノ」（二〇一八年『同志社女子大学学術研究年報』第六九巻）
- (9) (3) 論文に同じ。
- (10) 片桐洋一著『毘沙門堂旧蔵本古今注』（一九九八年 八木書店）
- (11) 伊東正義・黒田彰編著『和漢朗詠集古注釈集成第三巻』（一九八九年 大学堂書店）
- (12) 『書言字考節用集』架蔵宝暦版本による。